



2025年度 国際交流基金賞 受賞候補者推薦のお願い

国際交流基金賞は、国際交流基金設立の翌年である1973(昭和48)年から始まり、2025年度で52回目を迎えます。本賞では、学術、芸術その他の文化活動を通じ、国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に特に顕著な貢献があり、引き続き活動が期待される個人又は団体を顕彰して参りました。

2012(平成24)年度からは一般の皆様からも幅広いご推薦を頂戴しております。多くのご推薦をお待ちしております。

募集締切

2025年2月28日(金)(必着)

対象となる個人／団体	日本国内又は海外の個人又は団体。ただし、 自薦は選考の対象外 とします。
対象とならない個人／団体	(1) 国もしくは地方公共団体の現職公務員又はこれらに準ずる機関(特殊法人、独立行政法人等)の現職役職員であって、国際的活動を役職の本務とする個人(研究職にある個人を除く)。ただし、過去に、異なる身分において賞の趣旨に合致する貢献がある場合には、選考の対象となることがあります。 (2) 国内外を問わず、国及び地方公共団体の行政機関並びにこれに準ずる機関。 (3) 国内の団体で、主として公的資金によって運営されている機関及び当該機関に関わる法律に基づいて設立された機関等、公的性格の強い団体。 (4) 日本政府又は国際交流基金が支援している団体で、補助金・助成金等の金額が当該団体の年間総予算の過半を占める団体。 (5) 宗教活動、政治活動、又は選挙活動を主とする個人又は団体。 (6) 国際交流基金の活動分野以外の分野で主たる活動をする個人又は団体。 (7) 姉妹都市間又は学校間交流による友好親善を目的とした活動や趣味での活動、活動の成果還元対象が特定のグループ・サークルに限られる活動を主とする個人又は団体。 (8) 複数の団体の共同・合同による活動を1件の推薦とすることは可能。ただしその場合、その活動が一体不可分で、個々の団体単位の活動に分割し得ないものである必要があります。
対象となる活動分野	国際交流基金の主要事業分野である、「文化芸術交流」「日本語」「日本研究・国際対話」の3つの分野のいずれかを中心とした専門的な活動、又はこれらの分野を超えて横断的に活動する個人又は団体を対象とします。 ○文化芸術の分野において、日本の文化芸術の海外への紹介や発信、共同研究・制作等の創造的な活動を通じ、日本と諸外国の相互理解の増進や、国際文化交流に大きく貢献のあった個人又は団体。ポップカルチャー分野、建築、デザイン、スポーツ分野等、これまで授賞実績の少ない分野の推薦を特に歓迎します。 ○日本語にかかわる教育・研究、指導者の育成や組織化のために継続的に優れた活動を行い、又は日本語による表現や翻訳など言語としての日本語に強く結びつく活動を行うことで、教育・研究の発展や日本語の国際的地位の向上、日本と諸外国の相互理解の増進に貢献した個人又は団体。 ○日本研究又は日本に関連する知的交流等国際対話の分野において、指導性・独創性に優れた活動を行い、諸外国における日本研究の発展や、教育・研究を通じた日本理解の促進、日本と諸外国の知的ネットワークの強化に大きく貢献している個人又は団体。 ○その他、国際文化交流活動において顕著な活動を行い、国際相互理解の増進に大きく貢献した個人又は団体。
選考方法について	各分野における専門家らによる第一次選考ののち、国際交流基金が委嘱する有識者から成る選考委員会により、受賞者又は受賞団体を決定します。受賞者の発表は2025年7月を予定しています。

選考基準について	以下の3点を重視して選考を行います。 <table><tr><td>1</td><td>活動実績</td><td>日本国内外において、国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に特に顕著な貢献があるか。</td></tr><tr><td>2</td><td>継続性・将来性</td><td>今後も活動を継続し、国際文化交流の促進と深化に貢献が期待出来るか。</td></tr><tr><td>3</td><td>活動領域</td><td>活動の成果が特定の地域・団体に還元されるのではなく、より広い地域・国、分野へと普及しているか。</td></tr></table>	1	活動実績	日本国内外において、国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に特に顕著な貢献があるか。	2	継続性・将来性	今後も活動を継続し、国際文化交流の促進と深化に貢献が期待出来るか。	3	活動領域	活動の成果が特定の地域・団体に還元されるのではなく、より広い地域・国、分野へと普及しているか。
1	活動実績	日本国内外において、国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に特に顕著な貢献があるか。								
2	継続性・将来性	今後も活動を継続し、国際文化交流の促進と深化に貢献が期待出来るか。								
3	活動領域	活動の成果が特定の地域・団体に還元されるのではなく、より広い地域・国、分野へと普及しているか。								
推薦方法	1 推薦件数 計5件以内 2025年度に推薦頂いた候補者/団体は、2025年度から2027年度の選考対象となります。 2 推薦書フォームの電子データは、下記URLからダウンロードしていただくか、「kikinsho@jpf.go.jp」まで電子メールにてご請求ください。 https://www.jpf.go.jp/j/about/award/apply/ ※推薦書フォーム用紙の郵送を希望される場合は、基金賞事務局宛にご連絡ください。 3 推薦書送付先 推薦書は、電子データ(Microsoft Wordファイル形式)を「kikinsho@jpf.go.jp」まで電子メールにてお送りください(電子メールでの送付が難しい場合には、FAX又は郵送で下記へご送付ください)。なお、お送り頂いたデータ・書類は返送できませんのでご了承ください。 E-mail kikinsho@jpf.go.jp T E L 03-5369-6075 F A X 03-5369-6044 (国際交流基金賞事務局宛) 郵便〒160-0004 東京都新宿区四谷1-6-4 四谷クルーセ 独立行政法人 国際交流基金 広報部 国際交流基金賞事務局宛 4 記入上の注意 記入にあたっては、お分かりになる範囲でご記入ください。また、審査の参考になる資料があれば添付してください。なお、推薦者名は公表いたしません。									
授賞について	原則として3件。受賞者には、正賞(賞状)と副賞(賞金)を授与します。									
授賞式について	受賞者又は受賞団体の代表者を東京に招待して授賞式を行います(2025年秋を予定)。受賞者又は受賞団体代表者には、授賞式及び当基金が指定する行事にご出席頂く他、受賞記念講演の実施もお願いする予定です。									
2025年度 国際交流基金賞 推薦に関するFAQ	Q1: 国際交流基金賞は、各年度で何件ぐらいの推薦があるのでしょうか? A1: 例年、国際交流基金賞は70~80件の有効な推薦を受けています。 ご推薦頂いた候補者は、いずれも厳正に選考されます。 Q2: 推薦があった候補は、どのように選考されるのでしょうか? A2: 上記「選考方法について」及び「選考基準について」をご覧ください。 Q3: より多くの方から推薦があった候補が受賞するのでしょうか? A3: 選考基準は、上記A2のとおりで、推薦があった件数によって決まるというものではありません。 Q4: 2024年度に推薦した候補者が選ばれませんでした。再度推薦しても良いのでしょうか? A4: 推薦された候補が受賞しなかった場合、再度推薦頂くことに支障はありません。 なお、2025年度に推薦された候補者／団体は、2025年度から2027年度の選考対象となります。									

2024年度 国際交流基金賞受賞者

※2024年10月16日 東京で授賞式を開催しました。

塩田 千春（美術家）【日本】

塩田千春氏は、ベルリンを拠点に活躍する国際的な美術作家で「生と死」といった根源的テーマで作品を展開している。1997年ドイツ留学時の身体を素材とした作品が作家としての起点となる。2001年横浜トリエンナーレの泥のついた巨大なドレスの作品《皮膚からの記憶》、2002年のルツェルン美術館で30台のベッドを用いた《眠っている間に》等で示された「生と死」を暗示する作品は驚きを持って多くの観衆に迎えられた。塩田氏は、このような特色ある作品を世界各国で数多く発表し続けている。特に2015年のヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展で展示された、数万本の鍵を圧倒的な量の赤い糸で結びつけた作品《掌の鍵》は、視覚的インパクトと人々の願いや記憶が一体化した作品として高く評価された。塩田氏の活動は国際交流の実践であり、女性の国際的な活躍を促進する原動力ともなった。これら数々の顕著な業績とともに、今後益々の活躍も期待され、国際交流基金賞にふさわしい。



Chiharu Shiota
Berlin, 2023
Photo by Sunhi Mang

モンゴル日本語教師会【モンゴル】

モンゴル日本語教師会は、モンゴル全土の日本語教育の発展と普及に大きく貢献してきた。1975年のモンゴル国立大学文学部日本語コースの開設を皮切りに、日本語教育は初等から高等教育機関まで普及している。1993年に設立された同会は、現在363名の会員を擁し、現地の日本関係機関などと協力して日本語スピーチコンテストや日本語教育シンポジウムを開催している。また、2000年からは日本語能力試験の実施機関として活動し、「JF日本語教育スタンダード」、そのスタンダードに基づく初中等教育向けの教材『できるモン』の開発や普及にも力を入れている。毎年多彩な日本語教育関連行事を実施し、日本語教育の質向上に尽力している。今後のますますの活躍と発展を期待して国際交流基金賞を授与する。



セインズベリー日本藝術研究所【英国】

セインズベリー日本藝術研究所は、ロバート・セインズベリー卿ご夫妻の資金援助により、1999年に設立された日本の藝術・文化に関する調査・出版・交流のための研究機関であり、現在ではこの分野に関する欧州最大の研究機関の一つにまで発展している。本研究所にはフェローと日本を含む世界からの客員研究員がこれまで多く在籍し、設立以来90名を超える。またイースト・アングリア大学との教育連携により、学際日本学修士課程も設置している。図書館の史資料も5万冊以上あり、現在これらのデジタル化を進めている。セインズベリー日本藝術研究所は、近年では考古学やマンガ・アニメなどにも関心領域を広げる柔軟性を示すなど、今後も欧州における日本研究の中心機関としての活躍が期待でき、国際交流基金賞を授与するに値すると考える。



これまでの受賞者

● 国際交流基金賞 ● 国際交流奨励賞
2008年度より国際交流基金賞と国際交流奨励賞を統合。

年	賞	受賞者
2024	令6	塩田 千春（美術家）〔日本〕
		モンゴル日本語教師会〔モンゴル〕
		セインズベリー日本藝術研究所〔英国〕
2023	令5	宮城 聡（演出家／SPAC- 静岡県舞台芸術センター 芸術総監督・静岡県コンベンションアーツセンター館長）〔日本〕
		小川 洋子（小説家）〔日本〕
		ペルー日系人協会〔ペルー〕
2022	令4	ロベール・ルパージュ（俳優、脚本家、舞台・映画監督）〔カナダ〕
		社団法人韓日協会〔韓国〕
		グナワン・モハマド（詩人、作家、画家）〔インドネシア〕
2021	令3	是枝 裕和（映画監督）〔日本〕
		宮田 まゆみ（笙奏者）〔日本〕
		ハノイ国家大学外国語大学日本語文化学部／ ハノイ貿易大学日本語学部／ ハノイ大学日本語学部〔ベトナム〕
2020	令2	イルメラ・日地谷＝キルシュネライト（ベルリン自由大学教授）〔ドイツ〕
		新型コロナウイルス感染拡大により中止。
	令元	谷川 俊太郎（詩人）〔日本〕
2019		インドネシア元日本留学生協会（プルサダ）〔インドネシア〕
		エヴァ・パウシュ＝ルトコフスカ（ワルシャワ大学教授）〔ポーランド〕
	平30	多和田 葉子（小説家／詩人）〔日本〕
2018		津川 雅彦（俳優）〔日本〕 *国際交流基金特別賞
		細川 俊夫（作曲家）〔日本〕
		サラマンカ大学スペイン日本文化センター〔スペイン〕 *故・津川雅彦氏の貢献をたたえ特別に授与した。
2017	平29	アレクサンドラ・モンロー（ソノモン・R・グッゲンハイム美術館アジア美術上級キュレーター／グローバル美術上級アドバイザー）〔米国〕
		フレデリック・L・ショット（作家、翻訳家、通訳者）〔米国〕
		アンドレイ・ベケシュ（リュブリャナ大学名誉教授（日本研究））〔スロベニア〕
2016	平28	蔡 國強（現代美術家）〔中国〕
		スーザン・J・ファー（ハーバード大学教授／同大学ウェザーヘッド国際問題研究所日米関係プログラム所長）〔米国〕
		ブラジル日本語センター（CBLJ）〔ブラジル〕
2015	平27	王 勇（浙江工商大学東亜研究院院長／教授）〔中国〕
		富田 勲（作曲家）〔日本〕
		シビウ国際演劇祭〔ルーマニア〕
2014	平26	柳家 さん喬（落語家）〔日本〕
		ピーター・ドライスデール（オーストラリア国立大学名誉教授）〔オーストラリア〕
		モスクワ国立大学付属アジア・アフリカ諸国大学日本語学科〔ロシア〕
2013	平25	入江 昭（ハーバード大学名誉教授）〔日本〕
		山海塾〔日本〕
		泰日経済技術振興協会〔タイ〕
2012	平24	フランス国立東洋言語文化大学 日本語／日本文化学部・大学院〔フランス〕
		村上 春樹（作家、翻訳家）〔日本〕
		アイリーン・ヒラノ・イノウエ（米日カウンシル プレジデント）〔米国〕
2011	平23	タンブッコ パーカッション アンサンブル〔メキシコ〕
		カイロ大学文学部日本語日本文学科〔エジプト〕
		オギュスタン・ベルク（フランス国立社会科学高等研究院退任教授）〔フランス〕
2010	平22	佐藤 忠男（映画評論家）〔日本〕
		サヴィトリ・ヴィシュワナタン（デリー大学前教授）〔インド〕
		ベン＝アミー・シロニー（ヘブライ大学名誉教授）〔イスラエル〕
2009	平21	ボリス・アクーニン（作家）〔ロシア〕
		全米日本語教師会連合〔米国〕
		アーサー・ストックウィーン（オックスフォード大学日産日本問題研究所前所長）〔英国〕
2008	平20	マルコ・ミュラー（ヴェネツィア国際映画祭ディレクター）〔イタリア〕
		アンジェラ・ホンドゥル（ヒペリオン大学言語学部日本語・日本文学科教授）〔ルーマニア〕
		ケネス・B・パイル（ワシントン大学歴史学部、同大ヘンリー・ジャクソン・スクール教授）〔米国〕

年	賞	受賞者
2007	平19	ロイヤル・タイラー（元オーストラリア国立大学アジア研究学日本センター所長・教授）〔オーストラリア〕
		北川 フラム（アートディレクター、アートフロントギャラリー主宰）〔日本〕
		リービ 英雄（小説家、法政大学教授）〔米国〕
2006		アイシュ・セルチュク・エセンベル（ボスボラス大学教授、日本研究学会会長）〔トルコ〕
	平18	ジョー＆悦子・プライス（財団心遠館 代表）〔米国〕
		山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会〔日本〕
2005		サンクトペテルブルク国立大学 アジア・アフリカ学部〔ロシア〕
		金 容徳（ソウル大学校国際大学院院長）〔韓国〕
	平17	宮崎 駿（アニメーション映画監督）〔日本〕
2004		フィリピン教育演劇協会〔フィリピン〕
		中国日語教学研究会〔中国〕
		タバスム・カシミーリー（前大阪外国語大学ウルドゥー語外国人教師）〔パキスタン〕
2003	平16	穂吉 敏子（ジャズ・ピアニスト、作曲家）〔日本〕
		ジェームス・クワント（シネマテーク・オンタリオ シニア・プログラマー）〔カナダ〕
		李 徳泰（同徳女子大学外国語学部教授）〔韓国〕
2002		高良 倉吉（琉球大学法文学部教授）〔日本〕
	平15	ヨーゼフ・クライナー（ボン大学日本研究所所長）〔オーストリア〕
		石澤 良昭（上智大学外国語学部教授）〔日本〕
2001		加藤 幹雄（（財）国際文化会館常務理事）〔日本〕
		極東国立総合大学付属東洋学大学〔ロシア〕
		土日基金〔トルコ〕
2000	平14	大岡 信（詩人）〔日本〕
		ジェラルド・L・カーティス（コロンビア大学教授）〔米国〕
		タイ国元日本留学生協会（OJSAT）〔タイ〕
1999		ワルシャワ大学東洋学研究所日本韓国学科〔ポーランド〕
		東京 YWCA 「留学生の母親」運動〔日本〕
	平13	ウィリアム・ジェラルド・ビーズリー（ロンドン大学極東歴史学名誉教授）〔英国〕
1998		平山 郁夫（画家）〔日本〕
		コスタ・バラバノフ（マケドニア・日本友好協力協会会長、在スコピエ日本国名誉総領事）〔マケドニア〕
		三浦 尚之（ミュージック・フロム・ジャパン理事長、芸術監督）〔日本〕
1997		ベルリン・フェスティバル公社〔ドイツ〕
	平12	池 明観（翰林大学校日本学研究所所長）〔韓国〕
		石井 米雄（神田外語大学学長）〔日本〕
1996		ウィリー・F・ヴァンドゥワラ（ルーヴァン・カトリック大学文学部東方・スラヴ学科長）〔ベルギー〕
		ハイファ博物館ティコティン日本美術館〔イスラエル〕
		大同生命国際文化基金〔日本〕
1995	平11	フランク・B・ギブニー（ボモナ大学環太平洋研究所所長）〔米国〕
		ウォルフガング・サヴァリッシュ（指揮者、フィラデルフィア管弦楽団音楽監督、NHK交響楽団桂冠名誉指揮者）〔ドイツ〕
		アフメット・メテ・トゥンジョク（中東工科大学教授）〔トルコ〕
1994		山本 正（日本国際交流センター理事長）〔日本〕
		全米日系人博物館〔米国〕
1993	平10	ロバート・A・スキャラピーノ（カリフォルニア大学パークレー校名誉教授）〔米国〕
		團 伊玖磨（作曲家、日本芸術院会員）〔日本〕
		トマ・エルドス（パリ市立劇場他 芸術顧問）〔フランス〕
1992		釜山韓日文化交流協会〔韓国〕
		サントリー文化財団〔日本〕
1991	平9	孫 平化（中国日本友好協会会長）〔中国〕
		ロジャー・ゲッパ（ケルン大学教授）〔ドイツ〕
		カイ・ニエミネン（日本文学翻訳家、日本文化研究者、作家）〔フィンランド〕
1990		クラクフ日本美術技術センター〔ポーランド〕

これまでの受賞者

国際交流基金賞 国際交流奨励賞

年	賞	受賞者
1996	平8	李 御寧（梨花女子大学碩学教授）〔韓国〕
		エズラ・F・ボーゲル（ハーバード大学フェアバンク東アジア研究センター所長）〔米国〕
		五嶋 みどり（バイオリニスト、みどり教育財団理事長）〔日本〕
		コロンビア大学ドナルド・キーン日本文化センター〔米国〕
1995	平7	千 宗室（茶道裏千家家元）〔日本〕
		ドナルド・リチー（作家、映像史家）〔米国〕
		ハジ・アブドール・ラザク・ビン・アブドール・ハミド（マラ工科大学予備教育センター、ルックワイースト政策プログラム主任）〔マレーシア〕
		国宝修理装演師連盟〔日本〕
1994	平6	ハインリッヒ・ブファイファー（アレキサンダー・フォン・フンボルト財団事務総長）〔ドイツ〕
		河竹 登志夫（早稲田大学名誉教授／比較演劇学）〔日本〕
		パイシット・ピパタナクル（ナショナル・アッセンブリー事務局長）〔タイ〕
		講談社インターナショナル〔日本〕
1993	平5	ヨゼフ・ビタウ（グレゴリアナ大学学長）〔イタリア〕
		武満 徹（作曲家）〔日本〕
		タチヤーナ・リヴォヴナ・ソコロヴァ=デリューシナ（翻訳家）〔ロシア〕
		岩波ホール〔日本〕
1992	平4	スタン・タクディル・アリシャバナ（ナショナル大学学長／日本研究）〔インドネシア〕
		フリッツ・フォス（ライデン大学名誉教授／日本研究）〔オランダ〕
		黒沼 ユリ子（ヴァイオリニスト、アカデミア・ユリコ・クロヌマ校長）〔日本／メキシコ在住〕
		ピーター・コーニツキー（ケンブリッジ大学助教授／日本研究）〔英国〕
		林 望（東横学園女子短期大学助教授／古典文学）〔日本〕
		国際日本語普及協会〔日本〕
1991	平3	韓 炳三（韓国国立中央博物館館長／考古学、美術研究）〔韓国〕
		イアン・ニッシュ（ロンドン大学名誉教授／日英関係史）〔英国〕
		アルゼンティン日本協会〔アルゼンティン〕
		財団法人日本シルバーボランティアズ〔日本〕
1990	平2	梅棹 忠夫（国立民族学博物館長／民族学）〔日本〕
		ヴィエスワフ・ローマン・コタンスキ（ワルシャワ大学名誉教授／日本研究）〔ポーランド〕
		東京大学出版会〔日本〕
		インドネシア文化交流財団〔インドネシア〕
1989	平元	アレクサンダー・スラヴィク（ウィーン大学名誉教授／民族学、アジア研究）〔オーストリア〕
		デービッド・マッケクラン（ニューヨーク・ジャパン・ソサエティ顧問）〔米国〕
		細野 昭雄（筑波大学教授、経済学／ラテンアメリカ研究）〔日本〕
		外国人留学生問題研究会〔日本〕
1988	昭63	夏 衍（中国文学芸術界連合会副主席、中国電影家協会主席／小説、劇作）〔中国〕
		小澤 征爾（指揮者、ボストン交響楽団音楽監督）〔日本〕
		ジャン=ジャック・オリガス（国立東洋言語文化研究所教授／日本語、日本文学）〔フランス〕
		トロント日系文化会館〔カナダ〕
1987	昭62	ジェームズ・W・モーレイ（コロンビア大学東アジア研究所所長／国際関係、日本外交史）〔米国〕
		中根 千枝（東京大学名誉教授、(財)民族学振興会理事／社会人類学）〔日本〕
		ローケッシュ・チャンドラ（インド文化国際アカデミー理事長／仏教学）〔インド〕
		ヨーゼフ・クライナー（ボン大学教授／日本民族学）〔オーストリア〕
1986	昭61	フォス・マライニ（イタリア日本研究学会会長／文化人類学）〔イタリア〕
		ジャパン・ソサエティー・北カリフォルニア〔米国〕
		飯田 昭太郎（ブリティッシュ・コロンビア大学準教授／印度学、仏教学）〔日本〕
		日蘭学会〔日本〕
1985	昭60	エレノア・H・ジョーデン（コーネル大学教授／言語学、日本語教育）〔米国〕
		ベルナール・フランク（コレージュ・ド・フランス教授／日本文学、宗教思想）〔フランス〕
		国際教育振興会〔日本〕
		日本中国文化交流協会〔日本〕

年	賞	受賞者
1984	昭59	前田 陽一（国際文化会館専務理事）〔日本〕
		ジョン・G・クロフォード（前オーストラリア国立大学学長／経済学）〔オーストラリア〕
		エドワード・G・サイデンステッカー（コロンビア大学教授／日本文学・日本文化）〔米国〕
		川喜多記念映画文化財団〔日本〕
1983		AFS国際文化交流財団〔米国〕
	昭58	鈴木 鎮一（才能教育研究会会長）〔日本〕
		ドナルド・キーン（コロンビア大学教授／日本文学）〔米国〕
		ルネ・シフェール（国立東洋言語文化研究所所長／日本研究）〔フランス〕
1982		国際学会友会〔日本〕
		ユネスコ・アジア文化センター〔日本〕
	昭57	天野 芳太郎（ペルー天野博物館名誉館長）〔ペルー〕
		黒澤 明（映画監督）〔日本〕
1981		マリウス・B・ジャンセン（プリンストン大学教授／日本研究）〔米国〕
		アメリカ・カナダ 11 大学連合日本研究センター〔在東京〕
		ジ・アジアティック・ソサエティー・オブ・ジャパン〔在東京〕
	昭56	ウンク・アブドゥル・アジズ（マラヤ大学副学長／経済学）〔マレーシア〕
1980		G・リチャード・ストーリー（オックスフォード大学名誉教授／日本研究）〔英国〕
		東方学会〔日本〕
		出版文化国際交流会〔日本〕
		日本棋院〔日本〕
1979	昭55	岩村 忍（京都大学名誉教授／東洋学）〔日本〕
		ジョージ・C・アレン（ロンドン大学名誉教授／日本研究）〔英国〕
		ヒュー・ポートン（コロンビア大学アジア研究所上級研究員／日本研究）〔米国〕
		アフリカ協会〔日本〕
1978		日本語教育学会〔日本〕
	昭54	松本 重治（国際文化会館理事長）〔日本〕
		チャールズ・B・ファーズ（教育家、アジア研究者）〔米国〕
		ロベール・ギラン（ジャーナリスト）〔フランス〕
1977		栗原 健（日本外交文書編纂／近代日本外交・政治史）〔日本〕
		オーストラリア国立大学豪日経済関係研究委員会〔オーストラリア〕
	昭53	高木 ハル（日本学士院会員、東京大学名誉教授／米国政治史）〔日本〕
		フランク・J・ダニエルズ（ロンドン大学名誉教授／日本語教授法）〔英国〕
1976		ジェームズ・L・スチュアート（アジア財団日本駐在代表）〔米国〕
		言語文化研究所付属東京日本語学校〔日本〕
		講道館〔日本〕
	昭52	ロナルド・P・ドーア（サセックス大学教授、同大学開発理論研究所特別研究員）〔英国〕
1975		石橋 長英（日本国際医学協会理事長／医学／小児科・血清化学）〔日本〕
		東京大学法学部付属明治新聞雑誌文庫〔日本〕
		国際教育情報センター〔日本〕
		株式会社サイマル・インターナショナル〔日本〕
1974	昭51	ジョン・W・ホール（イエール大学教授、同大学アジア言語・文学科学科長／日本近代史）〔米国〕
		ロバート・E・ワード（スタンフォード大学教授、同大学国際問題研究センター所長／政治学）〔米国〕
		東洋文庫〔日本〕
		ドイツ東アジア文化協会〔在東京〕
1973		福岡ユネスコ協会〔日本〕
	昭50	吉川 幸次郎（京都大学名誉教授、東方学会理事長）〔日本〕
		エドウィン・O・ライシャワー（ハーバード大学教授、元駐日大使／日本研究）〔米国〕
		アジア学生文化協会〔日本〕
1972		日仏会館〔日本〕
		欧州日本研究協会〔欧州〕
	昭49	J・ウィリアム・フルブライト（元米国上院議員、フルブライト教育計画推進者）〔米国〕
		バーナード・H・リーチ（陶芸家）〔英国〕
1971		日本国際交流センター〔日本〕
		ジャパニーズ・カルチュラル・ソサエティー・シンガポール〔シンガポール〕
	昭48	セルジュ・エリセーエフ（ハーバード大学教授、イエンチン研究所所長／日本研究）〔米国〕
		国際文化会館〔日本〕
1970		ジャパン・ソサエティー〔米国〕
		上智大学〔日本〕